

1. 研究の背景と目的

法務省の在留外国人統計（2017 年 12 月末現在）によると、在留外国人女性が多い出身国は、中国（510,295 人）、韓国（296,552 人）、フィリピン（204,975 人）、ベトナム（118,103 人）、ブラジル（88,590 人）である。彼女たちは、それぞれの事情により日本へ移住しており、出身地によって移住の目的に特徴を見出すことができる。それは、次のように分類できる：①国際結婚により移住、②フィリピンからのエンターテイナーや中国からの研修生など就労を目的に単身で移住、そして③南米系の女性が、就労が目的で日系家族として移住（移住労働者と連帯する全国ネットワーク, 2009）。

日本における日本人と外国人との「国際結婚」は、1985 年はおおよそ 1 万 2000 件であったが、90 年には 2 万 5000 件と倍増し、2000 年には 3 万 6000 件と 3 倍増にまで達した（佐竹, 2011）。その後、2006 年の 4 万 4000 件をピークに緩やかに下降線をたどり、2015 年は、2 万 1000 件となっている。その内訳を見てみると、「妻日本人・夫外国人」のカップルの数 6,167 組であるのに対し、「夫日本人・妻外国人」のカップルの数は、14,809 組（厚生労働省・平成 28 年度 人口動態統計特殊報告）となっており、今なお日本人男性と外国人女性との結婚が主流である。そして「日本人配偶者」となる外国人女性の出身地は、中国（5,730 人）、フィリピン（3,070 人）、韓国・朝鮮（2,268 人）が上位を占めている（厚生労働省・平成 28 年度 人口動態統計特殊報告）。

本研究では、国際結婚について先行研究を分析し考察した上で、日本人男性と国際結婚をし、日本で子育てをした外国人女性（中国人 2 名、フィリピン人 2 名）を調査対象とした。彼女たちがどのように母国と文化・習慣・価値観の異なる日本で子育てをしてきたのかを聞き取り、いかなる行動が、日本での生活・子育てを成功させていったのかをグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、「日本への適応プロセス・フレームワーク」を構築することを目指す。更に、異国である日本で生きてきた人生の有り様を複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach : TEA）を用いて描き出すことを試みる。具体的には、外国人母 4 名の TEM 図を描くこととする。TEM とは、時間を捨象

せず個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする文化心理学の質的研究の方法論である（安田・サトウ, 2012）。中国人母とフィリピン人母の統合型 TEM 図を描くことで、外国人母が共通して辿る道のりや、日本でどのような壁や困難・葛藤を経験し、そしてそれらをどのように乗り越えながら子育てに取り組んだのか、日本という異文化に適応していったのかを考察する。また、これまでの日本人と国際結婚をした中国人女性の先行研究は、いわゆる「農村花嫁」に偏った傾向があった。日本の都市部で結婚生活を送り、子育てをする中国人母の姿を浮き彫りにすることは、「中国人妻・母」の研究において新たな知見を提供する可能性が高い。本研究の目的は、日本人と外国人との国際結婚の実態を歴史的に考察しつつ、特に日本人男性と結婚した外国人女性の異文化適応のプロセスを分析することを通して、言語習得や習慣の違いだけではなく様々な異文化適応の壁や葛藤の様相を浮かび上がらせ、複数の文化を抱えて生きる外国人母の異文化適応行動の全体像を明らかにすることである。

2. 研究方法

1) 調査方法

本研究は、日本人男性と国際結婚をした、日本に在住する外国人母を対象として調査研究を行ったものである。東京近郊の X 県で暮らす中国人女性 2 名およびフィリピン人女性 2 名に対して、それぞれ個別に半構造化面接と 2 回の追加面談を実施した。（尚、本研究は、明星大学研究倫理委員会の承認を得て実施している。）

2) 調査対象者

① T さん

中国・雲南省出身の 47 歳。高校卒。コンビニの弁当工場でパート勤務。結婚斡旋業者の仲介により、酪農農家を両親と営む日本人男性と結婚・来日・離婚。X 県へ引っ越し、職場で知り合った日本人男性と再婚する。夫は 55 歳（生協勤務）、長男は 12 歳（市立中学校 1 年生）、長女 10 歳（市立小学校 5 年生）。夫の両親は、結婚時既に他界。

② M さん

中国・上海市出身の 52 歳。旅行会社経営。日本に留学し、修士号取得後、東京の旅行会社に就職。顧客だった日本人男性と交際・結婚。夫は 54 歳（会社員）、長男は 17 歳（私立

高校 3 年生)、次男は 15 歳 (県立高校 1 年生)、長女は 11 歳 (市立小学校 6 年生)。夫の母が近隣で一人暮らし。

③ G さん

フィリピン・セブ島出身の 49 歳。四年制大学卒。フィリピン人児童の学習指導員、病院・法律相談の通訳などボランティア活動に従事。夫とは近所の紹介で見合い。夫は 65 歳 (建設機器関係企業定年退職後、委託社員)、長男 23 歳 (大卒・会社勤務)、長女 20 歳 (専門学校生)。夫の姉夫婦の世話・介護。

④ L さん

フィリピン・セブ島出身の 45 歳。二年制ビジネス系専門学校卒。工場勤務。夫と「国際お見合い」で出会い、結婚来日、離婚。現在は一人暮らし。元夫は 59 歳 (金融関係、定年退職後、警備員)、長男は 19 歳 (専門学校生)、長女は 16 歳 (高校生)。

3) 分析方法

データ分析の方法として、グラウンデッド・セオリー・アプローチと複線径路等至性アプローチ (TEA) の 2 つを使用した。本研究ではまず、グラウンデッド・セオリーの「データ分析の流れ」に従って、「データの読み込み」、「コーディング」、「ラベリング」、そして「理論的飽和」を行った。具体的な分析手順としては、まず録音したインタビュー内容を、すべて逐語録に起こし、分析データとした。次に、インタビュー対象者が語ったデータ内容に変化を加えることなくコーディングを行った。コーディングによって概念化された“グループ”は、コアカテゴリー、サブカテゴリー、そして下位カテゴリーへと分類された。それぞれのカテゴリーは、その後ラベリングされ、5 つのメインカテゴリーが形成された。分析結果はその後、ストーリーラインを通して分析を行った。最後に、カテゴリー間の相関関係を考慮しながら、適応プロセス・フレームワークを構築していった。

次に TEA の分析手順としては、グラウンデッド・セオリーの分析で得られた「下位カテゴリー」を分析単位として、4 名の外国人母の TEM 図を描き、時系列に彼女たちの適応へのプロセスを描いた。さらに、TEM 図で抽出された「分岐点」から「発生の 3 層モデル (TLMG)」を描き出し、外国人母 4 名の日本適応までの意識の変容を可視化した。

3. 分析結果

1) 異文化適応した外国人母 4 名のグラウンデッド・セオリーによる分析結果

分析の結果、日本人男性と国際結婚をし、日本で暮らす中国人母 2 名の日本への適応を構成する要素として、まず、5 つのコアカテゴリー、13 のサブカテゴリー、500 の下位カテゴリーが抽出された。またフィリピン人母 2 名は、5 つのコアカテゴリー、11 のサブカテゴリー、124 の下位カテゴリーが抽出された。本研究では、「中国人母 2 名の日本への適応プロセス・モデル」と「フィリピン人母 2 名の日本への適応プロセス・モデル」を構築し、この 2 つのプロセス・モデルを比較分析した上で、統合型フレームワーク「中国人母 2 名・フィリピン人母 2 名の日本への適応プロセス・フレームワーク」を構築した。統合型の【コアカテゴリー】および〈サブカテゴリー〉は、以下の通りである：

[1] 【日本という異国での暮らしの中で多くの戸惑いや苦労を経験する】

- ① 〈自尊感情の喪失・半人前/周辺化〉、② 〈日本人夫・家族の外国人妻への期待・要求〉
- ③ 〈日本語という「言葉の壁」・日本語習得の苦労〉

[2] 【日本社会へ自ら飛び込んでいき、自身の成長と進化を遂げる】

- ④ 〈日本語上達・習得のカギ〉、⑤ 〈日本社会へのアプローチ〉、⑥ 〈同胞コミュニティとの繋がり〉

[3] 【日本の社会に溶け込み、自信と余裕を持って子育てをしていく】

- ⑦ 〈子どもへの教育観〉、⑧ 〈子どもの中国人・フィリピン人アイデンティティ〉、⑨ 〈日本人夫の子育て・家事への不参加・無関心〉

[4] 【母としての責任を果たし、充実と安定した時期に入る】

- ⑩ 〈日本での生活・人生への満足感〉、⑪ 〈将来と老後の設計〉

[5] 【日本へ異文化適応した外国人母から見た異文化不適応を起こしている中国人母・外国人母たち】

- ⑫ 〈中国人母・外国人母たちの問題〉、⑬ 〈日本不適応を起こしている外国人母たちへのアドバイス〉。

2) 異文化適応した外国人母 4 名の複線径路等至アプローチ (TEA) による分析結果

分析の結果、外国人母 4 名の TEM 図では、以下の要素が抽出された: 必須通過点 (OPP) には「来日・結婚する」、「妊娠・出産する」、「子どもが就園・就学する」; 分岐点 (BFP) には「日本語教室に通う」、「子どもの幼稚園・学校には積極的に顔を出す」、「PTA 役員を引き受ける」、「子どもの教育に関心をもっている」、「子どもに自分の母国について伝える経験をもつ」、「日本人と共に仕事・ボランティア活動をする」; そして等至点 (EFP) には「日本語を身につけ、日本社会に自分の居場所をもちながら子育てをする」。さらに、分析の最終段階として、「発生の 3 層モデル (TLMG)」を描き出し、外国人母 4 名の深層を探った。第 1 層では、外国人母の行動レベル、第 2 層では、意識レベル、そして第 3 層では、信念・価値観レベルを表した。その結果、外国人母 4 名は、日本社会において日本への適応のプロセスを歩みながら、「日本で生きていくのだから、日本語を学び、そして日本のことを知ろうとする姿勢や日本人と交流しようとする気持ちをもち続けることが大切」という意識を自身のなかに獲得していったことが見出された。

引用文献

- 移住労働者と連帯する全国ネットワーク 2009 「多民族・多文化共生社会のこれから NGO からの政策提言」現代人文社
- 厚生労働省 2017 「平成 28 年度 人口動態統計特殊報告『婚姻における統計』の概況」
- 安田裕子・サトウタツヤ 2012 「TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開—」誠信書房
- 佐竹眞明 2011 「在日外国人と多文化共生：地域コミュニティの視点から」明石書店